

# 短編集 *All the Sad Young Men* における

## Fitzgerald の「若さ」への意識

---

池田 幸恵

---

### 序

F. Scott Fitzgerald にとって「若さ」は重要な問題であった。作品においては、Kirk Curnutt が “throughout his writing his fixation with youth is a central concern” (28-29) と指摘するように、Fitzgerald は最初の長編作品 *This Side of Paradise* (1920) から一貫して若さに関心を寄せ続けていた。また実人生においても、彼は30歳になって若さを失う前に死んでしまいたいということをたびたび述べており、1925年、29歳の時に編集者 Maxwell Perkins へ宛てた手紙の中で “You remember I used to say I wanted to die at thirty—well, I’m now twenty-nine and the prospect is still welcome.” (Kuehl 126) と記しているように、30歳まであと1年と迫った時にも若くあることに対し執着する気持ちを変わず持っていた。このように Fitzgerald にとって「若さ」の問題は創作においても人生においても切り離すことのできない問題であった。そしてまた、「若さ」への関心は単に Fitzgerald 個人に集約される問題ではなく、1920年代という時代と密接に関わった問題でもある。

Fitzgerald と「若さ」の関係を考察する際、彼が若さの喪失点として恐れていた30歳を迎える1926年に出版された短編集 *All the Sad Young Men* (以下 ASYM) は、重要な作品だと思われる。しかしながら、本短編集はこれまで一つのまとまった作品として、単独で論じられることはほぼ無かった。その主な原因の一つは、Fitzgerald にとって短編は金銭目的の商業的作品にすぎないと見なされており、その為、短編が軽視されてきたということがある。しかし、Fitzgerald にとって短編集は、長編と密接に結びついている。彼は長編を書き上げる際、まず短編でテーマや技法を試すということを行い、長編小説を出版した後、そのような長編と関係のある短編をまとめて短編集として出版するというのがパターンであった。未完の遺作を除いて、Fitzgerald の長編が4作品、短編集が4作品というのは、決して偶然ではなく、意図的なものなのである。つまり、短編集は長編と同様に、一つの作品として論考するに値するものだと言えるのではないだろうか。実際、彼は本短編集に対して、収録する短編作品全てに手直しをしたり、作品の配列順番をあれこれ入れ替えたり、収録作品を変更したりというように、一つの

作品として意図を込めて短編集を作り上げようとしている。

そこで本論では、本短編集が「若さ」の問題を扱った一つの有機的な作品であることを論証する。そして、Fitzgerald が「若さ」への意識、さらには「時間」の問題をどのように捉えていたのかを明らかにする。

## 1. 若者文化と *All the Sad Young Men*

Fitzgerald が関心を寄せた「若さ」の問題は、彼固有のテーマではなく、1920年代という時代が関心を寄せたテーマでもあった。若者という存在は、1920年代になってそれまでになく急激に人々の注目を集めるようになった。それを示す一例が、1916年に Booth Tarkington による *Seventeen* という小説が出版され、ベストセラーになったことである。この小説は、若者の行動や心理などを描いた話であり、*Seventeen* というタイトルが付けられているように、人を特徴づけるインデックスとして、従来の階級、人種、性別、宗教等ではなく、新たに年齢が使われるようになってきていることは興味深い。また、1920年代の若者が注目されたことは、彼らが “The Younger Generation” や “The Rising Generation” というように、そして Fitzgerald も含めた若き作家達が “The Lost Generation” というように固有の名前を与えられる存在だったことから窺い知ることができるだろう。年代を超えた縦のつながりよりも、同年代で構成される横のつながりによって、人々のグループが形成されるようになったのである。

若者の存在が注目を集めるようになったのには、学校の存在が大きく関わっていた。19世紀以降アメリカの産業経済が発達していくのに伴い、それに付随する高い技術・知識が求められるようになり、それらを学ぶために高校・大学へ進学する人々が増えるという教育の大衆化が起こった。高校への進学者は1900年から1930年の間に650%増しになり、大学への進学者は3倍に増えたほどだった (Fass 124)。そのように増加した大学への進学者にとって、大学はそれまでのような学問研究を目指す場所ではなくなっていた。特定の目的ではなく、大学がもたらす社会的恩恵を期待して進学する者も多く、そのような変化の中で、大学は学生にとって「カントリー・クラブ」(Brubacher 269) の様相さえ帯びようになり、大学で学ぶことではなく大学で過ごすことに関心が向けられるようになった。

進学者の増加に伴い起こった学校生活における変化は、“age homogenization” (Modell 79) という同じ学年を同一年齢の人々で構成しようという方針が、多くの学校で採られたことである。学校生活は、異なる年齢の人々と関わる場から、同一年齢の人々とだけ過ごす場となった。学校は、仕事、結婚、子育てという大人との関わりや、自身が大人になる経験から隔離され猶予された場所となり、この同一年齢集団の若者の結び付きを土壌として、若者文化が作り出されていっ

た。1920年代の若者を論じた著書の中で Paula S. Fass が, “Age, especially youth, had become a mode of identification, and college students were fashion and fad pacesetters whose behavior, interests, and amusements, caught the national imagination and were emulated by other youths” (126) と指摘するように, 大学生が若者文化を代表する存在となっていた。

このように1920年代の若者へ注目するという時代状況は, 本短編集の作品とも密接に関わっている。ASYMに収録されている短編“The Rich Boy”の中で, 主人公 Anson は“Groups of people had a disconcerting tendency to dissolve and disappear. The men from his own college—and it was upon them he had expended the most time and affection—were the most elusive of all” (33, 下線引用者) というように, とりわけ大学の友人に深い愛情を注ぐが, それがどうしてなのかということは作品中では一度も言及されていない。しかし1920年代の読者にはその空白の理由を, 大学生は若者文化の代表であったという時代背景から, Anson が大学の友人に愛情を注ぐのは, 社会人になった彼がいつまでも若者であることに執着していたからだと読めていたのではないだろうか。

このように ASYM の背景には, Fitzgerald と1920年代の読者の間で了解されている若者をめぐる時代状況があった。そして彼独自の若さへのこだわりと1920年代という時代の若者への注目が重なり合う地点に, ASYM は若者の物語として存在する。

## 2. 「若さ」をめぐる3つの様態

Fitzgerald にとって長編と短編が密接な関係にあることは既に言及したが, ASYM も1925年の長編 *The Great Gatsby* (以下 GG) の後を受けて出版された, GG と関連した短編集である。GG は単純に要約してしまえば, 主人公 Jay Gatsby が, 失った恋人 Daisy の愛をもう一度取り戻そうとする物語だと言うことができる。そのことは次のような, 語り手 Nick Carraway と Gatsby の会話によく表現されている。

“I wouldn’t ask too much of her,” I ventured. “You can’t repeat the past.”  
 “Can’t repeat the past?” he cried incredulously. “Why of course you can!”  
 He looked around him wildly, as if the past were lurking here in the shadow of his house, just out of reach of his hand.

“I’m going to fix everything just the way it was before,” he said, nodding determinedly. “She’ll see.” (86)

これは *GG* において、最もよく引用される箇所の一つであり、Gatsby が何としても取り戻そうとする Daisy との愛とは、つまりは「過去」という失われた時間だということがわかる。このように、*GG* の中心的なテーマの一つには、時間の問題がある。

一方 *ASYM* には、“The Rich Boy”, “Winter Dreams”, “The Baby Party”, “Absolution”, “Rags Martin-Jones and the Prince of Wales”, “The Adjuster”, “Hot and Cold Blood”, “The Sensible Thing”, “Gretchen’s Forty Winks”, という9つの短編が収められているが、この短編集も *GG* と同様に時間の問題を描いていると思われる。Fitzgerald は *All the Sad Young Men* というタイトルを付けたことについて、“This title is because seven stories deal with young men of my generation in rather unhappy moods.” (Kuehl 113) と述べているように、本短編集を単に“sad”な物語としてではなく、あくまで“young men”を重要な要素として短編集を編んだことがわかる。そして、若者にとって避けることが出来ないのが、永遠に留めておくことも、取り戻すこともできない、失われてしまう「若さ」という時間の問題である。*ASYM* には、若者たちの「若さ」という時間をめぐる葛藤が描かれているのである。

この「若さ」をめぐる葛藤の描かれ方は、3つの様態に区分けすることができる。まず1つ目は、「若さ」を留めようという、時間に抗う物語群である。これに区分されるのは、“The Rich Boy”, “Absolution”, “Hot and Cold Blood”である。“The Rich Boy”の主人公 Anson は、いつまでも若者であることを望む人物である。その為、唯一心から愛した女性 Paula とも、“... Anson feeling her tremble knew that emotion was enough. He need say no more, commit their destinies to no practical enigma. Why should he, when he might hold her so, biding his own time, for another year—forever?” (16) というように、結婚するという大人の責任を拒否し、「永遠に」恋人という責任を伴わない若者のままの関係でしようとする。こうして Anson は Paula を失い、周りの友人達も結婚し彼から離れていき、Anson は孤独という犠牲を払うが、それでも結局、若者のままでしようとする。次に“Absolution”では、“One afternoon when he [Father Schwartz] had reached the point where the mind runs down like an old clock, his housekeeper brought into his study a beautiful, intense little boy of eleven named Rudolph Miller” (78, 下線引用者) というように、「若く美しい」11歳の主人公 Rudolph と、「古時計」のイメージで表現される Father Schwartz という、若さと老い、若者と大人の対立が描かれている。きらきらと輝く空想世界に憧れる Rudolph に、Father Schwartz は苦々しい現実世界を教えようとするが、彼はそれを受け付けず、Father Schwartz の部屋を出ていく。Rudolph は若さの持

つ価値を選んだのである。そして、“Hot and Cold Blood”で描かれるお人好しなまでに親切な Jim は、お金をこれから生まれる子どものために使うか、かつて父親を助けてくれた恩人である老人のために使うかという選択を迫られる。この選択は、子どもに象徴される未来を選ぶべきか、老人に象徴される過去を選ぶべきかという選択であり、情けを捨て利己的に生きるという新たな生き方をするべきか、これまで通りの他人の為に尽くす生き方を続けるべきかという生き方の変化の問題でも。最終的に、Jim は老人にお金を貸すことで、これまでの生き方を貫くことを選択し、変化することを拒否する。以上のような3作品では、若者でいることと大人になることの間で葛藤しつつも、最後には若者でいること、つまりは変わらないままでいることを選び取る姿を Fitzgerald は描き出している。

2つ目の区分は、「若さ」を留めることは出来ないという、時間の不可逆さを知る物語群である。これに当てはまるのは、“Winter Dreams”, “Rags Martin-Jones and the Pr-nce of W-les”, “The Sensible Thing”, の3作品である。“Winter Dream”では、主人公の Dexter Green は14歳の時に出会った美しい少女を夢の象徴として生きていくが、永遠に美しいと信じていた彼女が年を取り衰えたことを知る。“Long ago, he said, ‘long ago, there was something in me, but now that thing is gone. Now that thing is gone, that thing is gone. I cannot cry. I cannot care. That thing will come back no more.” (65) と、永遠に不変のものなど存在しないという現実を認識するのである。“Rags Martin-Jones and the Pr-nce of W-les”は、“imagination”を賛美する女性主人公 Rags を手に入れるため、男性が一芝居打ち、彼女のための空想世界を作るという物語である。しかし、最後には Rags は、“Am I dreaming?” “Of course not! You’re wide awake. I made it up, Rags, don’t you see? I made up the whole thing for you. I had it invented! The only thing real about it was my name!” (110) と、全てが作り事であったという事実を突きつけられる。この作品は主人公が“imagination”という無時間な世界から、時間を有する現実世界に至る物語だと言える。そして、“The Sensible Thing”は、別れた恋人を取り戻そうとする愛の物語である。しかし、結局主人公は、“All the time in the world—his life and hers. But for an instant as he kissed her he knew that though he search [sic] through eternity he could never recapture those lost April hours.” (165) というように、失った時間を取り戻すことは不可能だということを知る。これら3作品で Fitzgerald は、時間の流れを止めること、時間を取り戻すこと、といった時間に抗う試みは不可能であるという、時間の不可逆さを描いている。

そして、3つ目の区分は、「若さ」を捨て大人になることを受け入れていくという、時間の流れに従う物語群である。これには、“The Baby Party”, “The

Adjuster”, “Gretchen’s Forty Winks”の3作品が当てはまる。“The Baby Party”の38歳の主人公 John Andros は, “When John Andros felt old he found solace in the thought of life continuing through his child” (66) と歳をとることに対し慰めを必要とする程不安を抱いており, 娘に対する感情は, 他者としての子どもへの純粋な愛情というよりも, むしろ自分の不安を埋め合わせる為の自己愛的な愛情である。そのような彼が, 子ども会で娘を守るために闘ったことにより, “John Andros knew at length what it was he had fought for so savagely that evening. He had it now, he possessed it forever,” (77) とそれまでになかった深い愛情を子どもに寄せる。つまり John は, 子ども会での経験を通して, 若さを失うことへの自己憐憫と決別し, 大人としての自己を受け入れたのである。“The Adjuster”では, かつての遊び暮らしていた頃の生活を, 主婦になった今も捨てきれない主人公 Luella が描かれている。“the light and glitter” (132) を望み, 家庭を捨てようとする Luella に対し, 精神科医 Doctor Moon は, 次のように大人の果たさなければならない役割について説く。

“We make an agreement with children that they can sit in the audience without helping to make the play,” he said, “but if they still sit in the audience after they’re grown, somebody’s got to work double time for them, so that they can enjoy the light and glitter of the world.” (132)

この Doctor Moon の説得によって, Luella は家庭に留まることを選ぶ。彼女は「若さ」への未練を捨て, 大人として生きることを選択したのである。“Gretchen’s Forty Winks”では, 家庭の為に仕事に打ち込む夫 Roger と, そのことが理解できずもっと余暇を求める妻 Gretchen の夫婦が描かれている。Roger は必死に取り組んだことによって仕事で成功を収め, なおかつ医者にも健康そのものと認められるが, 一方, Gretchen に余暇の重要性を説いていた友人の George は神経の病気で倒れてしまう。つまり, 家族の為に仕事に専念しようとする Roger の大人としての生き方が, この物語の中では評価されているのである。このように, 「若さ」に未練を残し葛藤しながらも, 若者のままでいることよりも, 大人になることを選び取っていく物語を, これら3つの作品で Fitzgerald は描いている。

### 3. 作品の配列 — 円環構造 —

ASYM の中で描かれている「若さ」との対峙の仕方には, ①時間に抗い, 若者のままでいようとする, ②時間の不可逆さを知り, 若者のままではいられ

ないことを認識すること、③時間の流れに従い、若者から大人になっていくこと、という3つの様態があることをこれまで指摘してきた。そのように、ASYMの各作品は、3つの様態に区分することができるだけではなく、さらに各短編をどのように並べるかという作品配列もまた重要な意味を持っている。ASYMでの各短編の順番は、1. “The Rich Boy”, 2. “Winter Dreams”, 3. “The Baby Party”, 4. “Absolution”, 5. “Rags Martin-Jones and the Prince of Wales”, 6. “The Adjuster”, 7. “Hot and Cold Blood”, 8. “The Sensible Thing”, 9. “Gretchen’s Forty Winks”というようになっている。この順番を、「若さ」への関わり方の3つの様態に区分けすると、①1. “The Rich Boy”, 4. “Absolution”, 7. “Hot and Cold Blood”, ②2. “Winter Dreams”, 5. “Rags Martin-Jones and the Prince of Wales”, 8. “The Sensible Thing”, ③3. “The Baby Party”, 6. “The Adjuster”, 9. “Gretchen’s Forty Winks”, というように分けられる。これを図示すると、次のようになる。

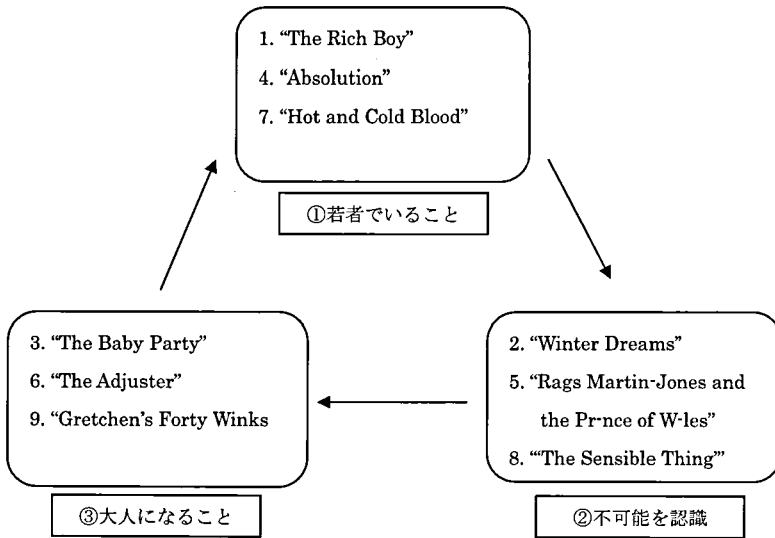


図1：作品の配列

ASYMの作品配列は、円環構造となっている。Victor A. Doynoは“Patterns in *The Great Gatsby*”という論文において、ギャツビーが眺めている印象的な姿で始まり、ギャツビーの眺めている姿で終わるといった、同じようなシーンが繰り返し描かれている“repetition”のパターンに着目し、GGには円環構造があると

いう重大な特徴を指摘している。さらに、この円環構造の持つ意味について、野間正二は「こういう円環構造には、もちろん語り手ニックの世界観が反映されている。……ニックは、人類が直線的な進歩発展をとげてゆくのだという世界観をもつことができなかつたのだ。」(269)と言及している。GGと密接な関係を持つ本短編集の作品配列が円環構造になっていることは、ただの偶然ではないだろう。ASYMの円環構造には、若者から大人へと成長すること、抗うことの出来ない時間を受け入れ従っていくことを、単純に肯定することができない Fitzgeraldの思いが表れているのではないだろうか。というのも、Fitzgeraldが「若さ」を捨て大人になることを全面的に肯定していたのなら、作品の配列は円環ではなく、直線的配列になっていたはずである。円環構造とはつまり、また同じ地点に戻るということである。大人になることを受け入れる物語の後に、再び若者のままでいようとする物語が配置され、そして、それが循環する構造になっていることで、若者から大人への成長は無効化されているのである。物語の内容における、「若さ」とどう関わるかという3つの様態は、若者から大人への成長という直線的区分になっている。一方、作品の並び方は、若者から大人への成長を無効化する円環配列になっている。このように Fitzgeraldは直線的内容と円環的配列という、相反するものを同時に用いることで、それまでの若さへの執着から大人になることを受け入れようとする新たな思いと、そこにまだあるためらいという相反しながら並存する思いを巧みに表現しようとしたのではないだろうか。

#### 4. 文学における「永遠」

これまで述べてきたように、「若さ」をめぐる問題は、同時に時間をめぐる問題でもある。作品配列を円環構造にすることによって、Fitzgeraldが時間への抗いから従うことへと時間に従順になることを無効化しようとしていたならば、それはどうしてなのだろうか。20世紀初頭において、若者が関心を集める対象になったことは既に述べたが、この時代はまた同時に時間そのものへも注目が寄せられていた。その背景には、スティーヴン・カーンが「1881年頃から第一次世界大戦が始まる時期において、科学技術と文化に根本的な変化が見られた。これによって時間と空間についての認識と経験にかかわる、それまででない新しい様態が生まれる。電話、無線、X線、映画、自転車、飛行機などの新しい科学技術が、この新しい方向づけの物的基盤となった。一方で、意識の流れの文学、精神分析、キュビズム、相対性理論といった文化の展開がそれぞれに、人の意識を直接形成することになった。」(1)と述べているように、19世紀末から20世紀初頭にかけての変化が、人々が時間へ注目する理由となっていた。こうした変化をもたらす文明



に対して、Fitzgeraldは批判的であったと思われる。というのも、彼は Oswald Spengler の *The Decline of the West* に感銘を受けていたからである。Fitzgeraldは1940年に、編集者へ宛てた手紙の中で、“Did you ever read Spengler—specifically including the second volume? I read him the same summer I was writing ‘The Great Gatsby’ and I don’t think I ever quite recovered from him.” (Kuehl 263) と Spengler の著作の影響について述べている。この本が Fitzgerald に影響を与えたのは間違いなく、Fitzgerald は新しい変化が文明を崩壊させると考え、進行する時間に進歩という希望を見出すことはできなかったであろう。

そのように、自身の「若さ」を奪っていく時間、次々と変化をもたらす文明を崩壊に導く時間という、時計によって刻まれる公的な時間は如何にしようと抗うことは不可能である。けれども小説家 Fitzgerald には、小説において時間を止め、永遠を描くという時間への抗い方が可能である。①時間に抗うこと、②時間の不可逆さの認識、③時間に従うこと、という時間に対する3つの様態を、円環構造にして回帰させることにより、Fitzgerald は永遠なる時間を表現したのではないだろうか。GG も ASYM もどちらも時間に抗うことの不可能さという直線時間の勝利を描きながらも、作品内に円環構造を持っている。それは、Fitzgerald は直線的時間には逆らうことはできないという時間の不可逆性を十分に認識しながらも、同時に文学において永遠なる時間を創りだそうとしたのだと考えられる。

## 結

Fitzgerald は約170作の短編を書いたが、その内でも現在、研究対象となっているのは、ごく一部の作品のみである。そして、短編集はその中にしばしば論じられる優れた作品を収めている場合でも、各短編が単独で論じられることはあっても、短編集として論じられることは稀であった。しかし、Fitzgerald にとって短編集はテーマや手法において、長編と密接に結びついた作品であり、短編を単独で論じることでは見えてこないものが、短編集という一つのまとまりとして論じることで見えてくる。ASYM は、そうしたまとまりある一つの作品として、論じるに足る短編集であると言える。

広島大学大学院

## 引用文献

Brubacher, John S., and Rudy Willis. *Higher Education in Transition: A History of American Colleges and Universities, 1636-1968*. New York: Harper, 1968.

Curnutt, Kirk. *The Cambridge Introduction to F. Scott Fitzgerald*. New York:

- Cambridge UP, 2007.
- Doyno, Victor A. "Patterns in *The Great Gatsby*." *Modern Fiction Studies* 7 (Winter 1966-67): 415-26.
- Fass, Paula S. *The Damned and the Beautiful: American Youth in the 1920's*. New York: Oxford UP, 1977.
- Fitzgerald, F. Scott. *All the Sad Young Men*. 1926. Ed. James L. W. West III. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- \_\_\_\_\_. *The Great Gatsby*. 1925. Ed. Matthew J. Bruccoli. Cambridge: Cambridge UP, 1991.
- Kuehl, John, and Jackson R. Bryer, eds. *Dear Scott/Dear Max: The Fitzgerald-Perkins Correspondence*. New York: Scribner's, 1971.
- Modell, John. *Into One's Own: From Youth to Adulthood in the United States 1920-1975*. Berkeley: U of California P, 1989.
- カーン, スティーヴン 『時間の文化史—時間と空間の文化: 1880-1918 / 上巻』 浅野敏夫訳, 法政大学出版局, 1993年。
- 野間 正二 『「グレート・ギャツビー」の読み方』 創元社, 2008年。

## Fitzgerald's New Thought on Youth in *All the Sad Young Men*

---

Sachie Ikeda

---

It is widely acknowledged that F. Scott Fitzgerald had a fixation on youth both in his writing and throughout his life. When he was twenty-nine years old, Fitzgerald wrote a letter to his editor, which said he wanted to die at thirty. In 1926, when he was approaching thirty, Fitzgerald published a collection of short stories titled *All the Sad Young Men*. It is reasonable to assume that *All the Sad Young Men* is essential to the study of Fitzgerald's thought on youth. However, it has been disregarded for a long time on the ground that it does not have an integrated theme even though each individual short story in the collection has been discussed. This essay is an attempt to demonstrate that *All the Sad Young Men* has the unified theme of youth, and furthermore, to clarify Fitzgerald's new thought on youth.

Fitzgerald titled the collection, which consists of nine short stories *All the Sad Young Men*, because he wanted to deal with young men of his generation in unhappy moods. Indeed, only seven stories depict "young men," while all of the nine stories deal with "sad" men. Therefore, we can conclude that Fitzgerald intended the theme of his collection to be "youth" rather than "sadness."

It is significant that while seven stories concern young men, the remaining two stories ("The Baby Party" and "Absolution") deal with an adult and a child. In "The Baby Party," the adult protagonist gives up his attachment to youth and contentedly accepts his role as an adult at the end. On the other hand, in "Absolution," the child protagonist decides to remain young by refusing to grow up. Both the adult and the child individually have clear ways of coping with the passage of time; however, it is not easy for young men to choose between maturity and youth. Fitzgerald may have included two stories on an adult and a child in the collection in order to emphasize the fact that the acceptance or rejection of the passage of time is a problem that the youth face.

There are three gradual phases in the other stories on young men. In the first phase, the young men long to stop the passage of time and remain eternally young. In the second phase, they perceive that there is no eternal youth. In the third phase, they come to terms with the passage of time that deprives them of their youth. The point that needs to be stressed here is that

although these phases are linear in the content, they are designed to be circular. This point reveals his desire to overcome his fixation on youth and at the same time, his reluctance to do so. However, there is no doubt that Fitzgerald came up with new ideas on youth in *All the Sad Young Men*.

*Graduate School of Letters, Hiroshima University*